

学習指導案作成の手掛かりとなる模擬授業の追究

—総合講義「教職実践研究Ⅰ」の実践を通して—

隈元 浩二郎〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

A Study of Mock Lessons for the Development of Teaching Plans

—Through Actual Performance for "Research into Teaching Practice Ⅰ"—

KUMAMOTO Kojiro

キーワード：模擬授業、バランス、着眼点、モデルの提示

1 はじめに

本学では、平成19年度から平成21年度までの3か年間の計画で、文部科学省特別教育研究経費事業「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」に取り組み、全学部・全研究科の教員養成体制整備と教育学部の転換を図ってきた。そこでは、新たな教育学部、教育研究科をはじめとして、「実践的教職科目群」を中心とした全学の教員養成カリキュラムを構築するとともに、鹿児島県の教員研修に対する協力体制を整備した。併せて、本学では鹿児島県教育委員会の協力を得て、筆者をはじめとする4名の現職教員等を学部専任教員として招聘し、教育学部附属教育実践総合センターを4部門10名体制に拡充・改編することで、これらの実現に迫った。

特に、教員養成の柱となる「実践的教職科目群」の取組では、学生が大学と教育現場を往還しながら学ぶことができるカリキュラムを構築した。

1年次の「教職基礎研究」では、鹿児島県教育委員会及び鹿児島市教育委員会の支援を受けて、鹿児島市内の公立小・中学校（例年70校前後）において「学校体験」を実施し、そこで得た実践知を基に、教職の基礎に関する理論知を確認させた。

2年次・前期の「教職実践研究Ⅰ」においては、授業に主眼を置き、略案程度の指導案の作成及び模擬授業の実践に取り組みさせることで、授業の基礎・基本に迫った。同後期の「教職実践研究Ⅱ」においては、学級経営の在り方を中心に、本県の特色でもある小規模校や複式の授業、僻地教育などについても、日置市内の小・中学校での学

校体験を交えながら学ばせた。

3年次の「教育実地研究」では教育実習の事前・事後研究として教科指導や生徒指導、教育相談などの基礎・基本となる理論知を整理させている。

4年次の「教職応用研究（教職実践演習）」では、教育実習後の補充・発展的な個別課題の対応を目的に、他学部での試行を経て、平成23年度の実施に向けて課程申請までこぎつけたところである。（図1参照）

学 年	科 目 名	特 徴 等
1年次	教職基礎研究	教職基礎確認
2年次	教職実践研究Ⅰ（前）	授業設計基礎
	教職実践研究Ⅱ（後）	学級経営基礎
3年次	教育実地研究	実習前後研究
4年次	教職応用研究	個別課題対応

図1 実践的教職科目群の構成

そこで、本稿ではこれらの実践的教職科目群の中から、平成20年度から2年次前期の学生を対象に取り組んでいる「教職実践研究Ⅰ」に注目し、授業設計をはじめとする教材分析や教科指導の在り方、指導案の作成、模擬授業へのチャレンジなどの実践を通して、特に指導案作成の手掛かりとなる模擬授業の提示の仕方を中心にポイントを整理することで、今後の実践充実の一助としたい。

2 教職実践研究Ⅰの構成

(1) 教職実践研究Ⅰの目標等

「教職実践研究Ⅰ」の実施に当たり、その目標を次のとおりに設定した。

公開授業や授業研究を参観したり、事前に作成した自分なりの指導案と模擬授業とを対比的に考察し、その上で模擬授業を行ったりすることを通して、「学習指導力育成」の観点から、教師としての基礎的、基本的な知識・技能等を具体的に身に付けることができるようにする。

図2 「教職実践研究Ⅰ」授業計画(目標)

また、学修目標(学生の達成目標)を、次のとおりに設定した。

- ア 「学習指導」に関する力量形成を目指して自己課題を明らかにしながら、意欲的に授業参観をしたり、指導案作成を行ったりし、その解決に進んで取り組むことができる。(自己改善力)
- イ 児童生徒に学力向上を図る授業を目指し、授業前、授業中、授業後の各段階における基礎的、基本的な事項(教育課程や学習指導法などの理解)を身に付けるとともに、1単位時間の授業を構想し、学習指導案を作成することができる。(授業デザイン力)
- ③ 学習指導の基礎的、基本的な事項についての理解に基づきながら、模擬授業や授業研究を行うことができる。(授業展開力)

図3 「教職実践研究Ⅰ」授業計画(学修目標)

まず附属学校の授業や研究公開を繰り返し参観させ、実践知に基づく授業のイメージを持たせた。(図2参照)次に、指導案の作成に取り組むに当たっては、各自の学習課題を明確にさせるとともに、個々が指導案を作成し、模擬授業を実践することを見通しとして明確にもたすことを重視した。(図3参照)また、各教科専修の担当者とも十分に連携を図りながら意図的、計画的にカリキュラムを構築するとともに、理論知の獲得に当たっては、バランスを重視しながら取り組んだ。

(2) 授業計画

そもそも「教職実践研究Ⅰ」のねらいの背景に

は、教育実習時において学生が学習指導案の作成のみに終始してしまうという実態がある。教育実習は、学生が学校現場に身を置き、授業の実践はもちろんのこと、児童生徒たちとコミュニケーションを図ったり、担任の学級経営のノウハウを垣間見たり、教師間の連携の在り方を学んだり、教育課程に基づく学校行事等の取組を実体験したりするなど、実践知として獲得すべき内容は多岐に渡っている。しかしながら、学生自身は指導案の作成のみに四苦八苦し、教壇に立つという授業の実践そのものに関心を奪われてしまい、様々な貴重な体験や実践を見逃してしまっているのが現状である。

そこで、指導計画を作成するに当たっては、これらのことを十分に考慮に入れ、理論知と実践知のバランスが図れるよう、15時間の講義を三つのステージに分けて指導計画を構成した。

	形態等	内容・方法
第1ステージ	①4/10 講義 ワーク	「オリエンテーション」 ・目標、内容、計画、評価など ・解決したい課題及び自己評価
	②4/17 講義 演習	「学習指導案と授業」 ・目的と作成の手順 ・学習指導案、授業の要素など
	③4/24 講義 演習	「授業の進め方」 ・各過程における進め方 ・学習形態、授業の要件など
	④5/8 講義 演習	「きめ細やかな指導」 ・問題解決的な学習の模擬体験 ・発問や板書などの基礎・基本
	⑤5/15 講義 演習	「授業観察と授業設計」 ・授業観察の視点、学習評価 ・授業設計へのつなげ方
	⑥5/22 講義 演習	「教材研究の進め方」 ・公開授業の研究の仕方 ・教材研究の取組方
第2ステージ	⑦5/29 演習	「参観授業の分析」 ・公開授業の発問・板書づくり ・研究公開への参加の仕方
	⑧6/5 現地 調査	「授業観察①と授業研究①」 ・研究公開授業への参加 ・教科分科会での授業研究
	⑨6/12 演習 ワーク	「研究公開の授業で学んだこと」 ・研究公開に関する話し合い ・模擬授業箇所の確認

第2ステージ	⑩6/19 講義 演習	「学習指導案の作成」 ・指導案作成のための演習 ・発問・板書計画の作成
	⑪6/26 現地 調査	「授業観察②の実施」 ・自作の指導案との比較 ・改善点の視点のとらえ
第3 ス テ ー ジ	⑫7/3 講義 演習	「模擬授業の準備」 ・指導案の練り直し ・模擬授業の具体的な準備
	⑬7/10 演習	「模擬授業の実施」 ・教科専修ごとによる模擬授業 ・子ども役等の役割分担
	⑭7/17 演習 評価	「授業研究②の実施」 ・教科専修ごとによる相互批評 ・司会・記録等の役割分担
	⑮7/24 総括 講義	「本科目の成果及び今後の課題」 ・学習指導に関する振り返り ・自己評価及び授業評価

図4 「教職実践研究1」授業計画（指導計画）

第1ステージでは、まず授業の要素や目的、指導案作成の目的など、学習指導に関する基礎的、基本的な内容を位置付けた。そして、授業の進め方や師範的な模擬授業のモデル提示、授業デザインのための基礎・基本など、第2ステージの附属学校での授業参観等につながる理論知の定着を図るために、学習指導案のモデルや模擬授業の提示など、体験的な講義や演習を構築した。

第2ステージでは、附属学校の研究公開や研究授業への参加など、学習指導案の作成や模擬授業の実践に直接つながり、演習の手掛かりとなる現地調査を主体に構築した。ここでは、特に研究授業と授業研究の参観に主眼を置き、学校現場におけるモデル的な研究授業や授業研究を体験することで、第3ステージで取り組む学習指導案の作成や模擬授業の実践の手掛かりとなるよう、調査記録の取り方（ワークシートの構成や記入の仕方）にも配慮した。

第3ステージでは、第1や第2ステージで獲得した理論知や実践知を基に、学生自身が作成した学習指導案の模擬授業を全員に実践させた。各教科専修単位ごとに、進行計画や役割分担などを決めさせ、第2ステージで体験した授業参観や授業研究の経験が実践に生きるよう配慮した。また、

ワークシートを活用して取組の記録が残せるように指導するとともに、司会や記録係も学生に分担させ、客観的な授業研究の把握ができるよう指導した。

3 モデルとなる学習指導案の提示

前述のとおり、第1ステージでは学習指導案の作成や模擬授業の実践に向けて学習指導に関する基礎的、基本的な内容を体験的な演習を交えながら展開したが、ここでは第4回の「きめ細やかな指導」で取り組んだモデル的学習指導案の提示について取り上げたい。

学習指導案の作成については、第2回の講義において学習指導案の定義や作成の目的、作成の手順など、具体的な作成スキルや授業の要素などについて基礎的、基本的な内容について学習している。第3回の講義では、授業の具体的な進め方や各指導過程における取組方、学習指導法の工夫・改善の留意点などについて学習している。

そこで、第4回においては2回の講義で習得した理論知を確実に定着させるために、モデルとなる学習指導案を提示して、具体的なイメージ化を図った。さらに、模擬授業を進めながら、第3回の講義で学習した授業の具体的な進め方とも比較・確認させながらきめ細やかな学習づくりに迫った。

(1) 学習指導案の改善

- ・単元名 「文学の楽しみ」
(光村図書；平成2年度版、「朝のリラ（詩）」、「ひと声」)
- ・教材名 「ひと声」(畑 正憲 著)

図5 模擬授業使用した教材

師範的模擬授業の提供は平成20年度からスタートさせ、今年度で2回目となる。筆者自身の専門が国語科ということもあるが、授業イメージのとらえやすさや言語活動の充実、発問や板書計画の取り組みやすさ、教材分析と模擬授業との関連性のとらえやすさなど、学習指導案作成の第1ステップとして国語科の模擬授業は最適なモデルで

あると考えた。また、学生の発達段階や学生自身が生徒役になること、授業の難易度なども考慮し、経験値としてより近く、記憶も新しく、組みやすい中学校第1学年の教材を選択した。

また、学生が生徒の立場に立ち、読解を深めたり、発表したりすることを考慮に入れ、魅力ある教材、かつ、作品に入りやすい適切な分量の文学的文章を選択した。畑正憲著の「ひと声」はモデルの学習指導案にもあるように、馬の親子の絆をテーマに描かれた作品で、親しみやすく読みやすい作品であり、教材分析と学習指導案作成の関連性を明確に示すことができる短編作品である。

(資料pp10, 3「単元設定の理由」参照)

ここでは、初年度の実践を踏まえ、学習指導案の作成に当たり、工夫・改善した点について述べたい。

ア 学習指導案の構成の把握

「略案程度の学習指導案を書けるようになる」、本講座はそのような目標を掲げてスタートした。そこで、前時の2講「学習指導案と授業」と3講「授業の進め方」において、学習計画が学習指導要領や教育課程などに基づいて立案されていることをはじめ、年間指導計画の存在やPDC Aサイクル、授業の三要素、教材分析の意義や取組方、学習指導の進め方、授業デザインの取組方、学習指導法改善の必要性、学習指導案のモデル提示など、学習指導案作成や模擬授業チャレンジへのアプローチは意図的、計画的に、かつ基礎的、基本的事項を懇切丁寧に指導した。事前の基礎知識としては十分すぎるほど指導したが、学習指導案から教師の動きを読み取ったり、教材分析のポイントをとらえたりすることは、学生にとってかなりハードルの高い内容である。

そこで、初年度は学習指導案をストレートに提示していたが、今年度は学習指導案の構成がとらえやすくなるよう解説等を加え、省略した内容についても構成される要素を簡条書きにして提示した。(資料pp10, 3「単元設定の理由」参照)

イ 教材分析の反映

教材分析の内容を学習指導案の中でどのように

反映させるかは、学生にとって大きな課題の一つである。モデル提示した学習指導案は略案なので、単元計画のレベルでは概略しか示せないが、本時の指導計画においては可能な限り具体的な解決例等を提示した。本時の実際においても、生徒の活動が具体的にイメージできるように、具体的な行動を提示したり、模範解決例を全文提示したりするなどの改善を試みた。(資料pp 2～3参照)

(2) 問題解決的な学習の提示

昨年度、はじめて模擬授業にチャレンジさせたが、ほとんどの学生が導入部分、つまり、開始から15分程度の内容の模擬授業を展開した。学生たちは適切に前時を振り返り、本時の学習目標(めあて)を確認する作業をこなした。しかしながら、明らかにその行為の目的や効果は認識せず、紋切り型に行為が展開された。

そこで、今年度の学習指導案は問題解決的な学習の指導過程に沿った内容に改善した。

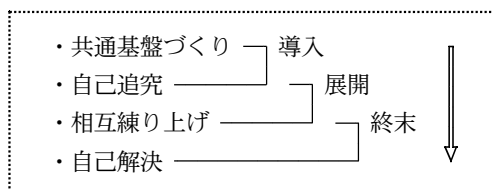


図6 問題解決的な学習の展開

このように、問題解決的な学習の展開を学習指導案に記載し、模擬授業を展開しながら解説したことで、学習目標の中に1単位時間でどのように学ぶのかという活動目標と、1単位時間の中で何を学ぶのかという内容目標の二面性があることを明確にとらえさせることで、模擬授業の行為一つ一つに意義や意味をもたせることができた。

(3) 略案としての学習指導案の開発

平成20年度は、略案とはいいながら要件を満たすために、モデルとして示した学習指導案が、A4・4枚の分量となってしまった。やはり、学生にとっては学習指導案の作成自体が量的に負担となったようである。教育実習の際に、学習指導案の作成が負担とならないように留意したはずが、本末転倒の結果となってしまった。

そこで、前述のとおり盛り込むべき内容は的確に絞り、略せるところは省略し、A4・3枚にまとめた。また、本文やあらすじなどの補助資料等も整理し、一冊にまとめて提示した。

今後、各教科専修レベルでの学習指導案を開発して提示することで、学生の興味・関心も高まり、理解や実践が能率よく進められると考える。

4 模擬授業と学習指導案がつながる着眼点

(1) 生徒役になる学生への支援

畑正憲著「ひと声」の師範的模擬授業を実施するに当たり、当時の年間指導計画を頼りに作品の場面を四つに分け、全6時間で単元の計画を立てることにした。当然、模擬授業につながるように教材分析を経て本時を定めたが、作品の展開や主題、内容の魅力、時間の都合などを勘案し、最後の場面4を模擬授業の本時として決定した。

しかしながら、ここで大きな課題が生じる。講義時間は90分はあるものの、本来、学校現場における生徒たちは第1時間目に作品を通読し、初発の感想を確認し、場面分けをしたり、小見出しを付けたり、場面毎の主題を考えたりしている。さらには、場面1から場面3までを精読しながら読解を深めてきている。つまり、生徒たちは指導過程に沿ってそれなりの事前学習や共通の基盤、深い読解を共有して本時を迎えているのである。

ところが、学生たちは短時間で作品を読み、注文的にあらすじや場面までの経過、生徒たちが学習したであろう足跡をとらえ、模擬授業を迎える。昨年度は、導入部分は解説を付けながら授業を進めたり、あらすじの資料等を渡したりして50分の模擬授業を展開したが、やはり習得した共通基盤の個人差が著しく、解釈等には大きな差が見られた。模擬授業後、残りの40分で十分に解説はしたものの、学生個々のとらえには個人差が生じてしまった。

そこで、今回は下記のとよりの改善策を講じて模擬授業に臨んだ。

ア 教材「ひと声」を前時（1週間前）に配付し、通読の上、「初発の感想」を記録し、持参する旨の事前課題を指示する。

イ 事前に背面の黒板にモデルとなる板書を作成して提示する。模擬授業は時系列で全面の黒板に再掲していくが、時間の都合上、すべては再現できないので、省略部分は背面黒板で確認させる。

ウ 前面黒板の横にプロジェクターを設置し、あらすじ等の事前情報等を掲載できるように準備する。

エ ワークシートに実物大のノートを提示し、学生が実際の授業と同じようにノートがとれる状況を再現する。

オ 限りなく実際の授業に近づけるために、表示や馬の親子の挿絵等、板書計画を工夫する。

カ ゆさぶりの場面等における中心発問やゆさぶり発問、KRなどを実演し、そのポイントをプロジェクターで提示しながら発問計画の重要性を確認させる。

キ レディネス・テスト等、形成的評価を体験することができる場面を学習指導案に盛り込むと同時に、模擬授業でも実際と同様に実施し、それらの手法を体験させる。

図7 模擬授業の改善策

以上のような手立てを講じたことで、学生たちはスムーズに模擬授業に入り込むことができ、特に山場となる場面（主題の「絆」に迫る場面）では深い学生たちの読解がなされ、活性化した授業場面を実現することができた。

(2) 発問・KRを重視した指導の工夫

1講では学習指導に関する「自己課題チェック表」を配付し、自己評価を実施した。そして、最後の15講では総括講義と併せて、再び同様の自己診断を実施し、その変容をとらえた。

自己診断項目		H21	H20
① カリ キュ	ア 各教科の学習指導要領に記載されている教科目標や各学年、各領域等の内容を把握していますか。	0.54	なし

② 教材分析力及び授業デザインに関する事項	イ 学習指導要領や年間指導計画などで指導する単元の目標や内容などを確認することができますか。	1.10	1.35	
	ウ 教科書や資料などを分析して教育的価値を明らかにし、指導すべき基礎的・基本的な内容を明確におさえることができますか。	1.07	1.09	
	エ 目標と結び付けて、単元の各主題や指導過程の設定、時間配分等を行うことができますか。	1.15	なし	
	オ 子どもの実態や意識について把握し、単元の位置などから本時の目標を正しく設定することができますか。	0.80	1.13	
	カ 導入・展開・終末の基本的な指導過程にそって、一単位時間の学習指導案を教科書を用いて作成することができますか	1.34	1.65	
	キ 定着の状況に応じて、学習形態を工夫したり、個に応じた指導などきめ細かな指導を工夫したりすることができますか。	0.66	0.57	
	ク 基礎的・基本的な内容について反復指導したり、具体物の提示や実験などを工夫したりして、定着を図る工夫をすることができますか。	0.95	0.65	
	ケ 子どもの障害の程度や特性などに配慮して教材・教具を工夫したり、指導方法を工夫したりすることができますか。	0.46	0.39	
	③ 授業展開力及び授業	コ 学習のねらいにそって、興味・関心を高めたり思考を深めたりするような発問を工夫することができますか。	0.85	0.75
		サ 学習の流れにそって、子どもの反応を受け止めながら内容を構造化したり、丁寧に板書したりすることができますか。	0.66	0.74

評価力に関する事項	シ 話し方や表情を工夫したり、子どもの反応に対してうなずきやほほえみ、相槌を与えたりすることができますか。	0.80	0.35
	ス 視聴覚機器や教育機器を積極的に活用し興味・関心を高め、指導の効果を高めることができますか。	0.76	0.48
	セ 目標を達成した具体的な子どもの姿を「評価規準」として設定し、計画的に評価することができますか。	0.39	0.67
	ソ 学習中や学習前後の子どもたちの変容を評価し、補充指導や授業の改善に役立てることができますか。	0.61	0.67

図8 「自己課題チェック表」

図8は、初年度と本年度の変容率を比較したもののだが、コミュニケーションに関連した事項の変容率は高まっている。学生が苦手としている生徒とのコミュニケーションの取り方やKR情報の提示の仕方、ゆさぶり発問を投げ掛けるタイミング、机間指導における生徒との関わり方など、発問計画を中心とした模擬授業での解説や生徒と教師のやりとりの確認・再現など、コミュニケーションの取り方のポイントを細かく確認しながら演習した成果が数値化されている。(図8③コ参照)

特に、KR情報の提示の仕方については、学生のほとんどが言語外言語の存在に高い興味を示していた。学生たちはペアやグループを組み、役割分担をして関わり合う中で、細部にわたって相互の言語活動や言語外言語の効果について具体的に確認しながら演習に取り組んだ。それらの成果が、自己評価にも顕著に表れていると言える。(図8③シ参照)

(3) 学習活動の意義付け

学生たちは、3講の中で指導過程の展開として「導入」、「展開」、「終末」を学習している。しかしながら、導入段階で「学習目標」を確認したり、小テスト(レディネス・テスト)を実施した



図10 模擬授業における板書

りすることが、理屈としては理解されても、1単位時間の中で具体的にどのような効果を生じているのか、展開の学習活動にどのような影響を与えているのか、終末のまとめや次時の予告とどのようにつながっていくのかなどの見通し的な関連付けはなされていない。

そこで、本時の導入段階においては、新出漢字の小テストや自己追究の記載について、ワークシートに設定した実物大ノートを活用し、生徒目線でノートづくりに取り組みませた。終末段階においても、自己解決の修正を実物大のノートを活用して修正に取り組みませた。実際に生徒の立場に立って学習活動を再現することで、新出漢字をノートに書くことが作品の読みの保証につながることや、自分の考えを文字言語としてノートに書くことが、自己の理解の程度を認識する学習活動につながっていることを再確認することができるのである。(資料pp11, 5(3)「下位目標行動」参照)

(4) 板書の工夫

図10は、4講の中で使用した板書である。板書の指導において重視したポイントは、次の4点である。

- ア 授業を構造化することの意義
- イ 1単位時間の完結を意識した板書
- ウ ノート指導と連携した板書
- エ 情意面の高揚に配慮した板書

図9 板書指導のポイント

ア 授業を構造化することの意義

今回の模擬授業では、問題解決的な学習の展開を重視した。生徒自らが課題をもち、学習の見通しをもちながら友達と協力し合って課題を追究していくことの意義を強調した。そして、生徒の理解が深まったところで、最終的な解決を自力で導く授業展開の魅力について熱く語った。

しかしながら、授業の展開そのものは無限に存在し、多様な展開方法を教師自身が身に付け、バランスの取れた授業を展開することも重要であることを語った。それでもなお、問題解決的な学習の展開は、生徒たちの主体性を導く上で極めて効果的な学習展開であることも確認した。

その上で、授業を構造化して展開することは、国語に限らず、あらゆる教科で重視される意義ある授業展開であることを確認した。学習指導案の「下位目標行動」や「本時の実際」と比較しながら、三角法を用いた板書が教科書の手掛かり(白チョーク)と生徒の読み取り(黄チョーク)、導き出した解決のポイント(赤チョーク)によって肉付けされ、次第に丸く板書が構成されていく過程を体感させた。そして、ほぼ丸く活字で板書が埋まった頃合いが、解決の時期であることも気付かせた。

イ 1単位時間の完結を意識した板書

「導入」、「展開」、「終末」のすべてが、1枚の板書で完結することの重要性を強調した。教師は授業に夢中になると、語りすぎ、書きすぎになりがちであること、意図的、計画的に語り、板書することが涵養であることを指導した。つまり、1単位時間の最後に、生徒が板書を振り返り、本時の足跡をたどれる板書が求められるのである。

ウ ノート指導と連携した板書

前述のとおり、1単位時間の板書が、1枚の黒板で完結することが望ましいのと同様に、ノートも見開き2ページ分が、1単位時間のノートとして完結することが望ましい。(図11参照)

ノートは上段から「日付の欄」、中段が「板書の欄」、下段が「作業の欄」となる。日付の欄には、本時の日付が記入されるとともに、復習や授業中の振り返りなど、その都度、立ち返った日付を記入させる。そうすることで、反復の回数や復習の軽重が確認できる。また、生徒が保護者等に説明することで、どのような授業が展開されているかという説明責任の実現にもつながる。

「板書の欄」は、まさしく教師が作成する板書を記載する欄となる。生徒は、ほとんどの場合、教師の板書のとおりノートするので、板書が黒板一面で完結することは、ノート指導と大きく連動していると言えよう。

「作業の欄」は、生徒が小テストを記載したり、初発の感想、自己追究、自己解決など、自由に記載したり、関係する資料等を添付したりする活動的作業の欄である。

ノート指導については、今回の模擬授業において直接関係する内容ではないが、教師が授業を展開する際の配慮事項として指導した次第である。

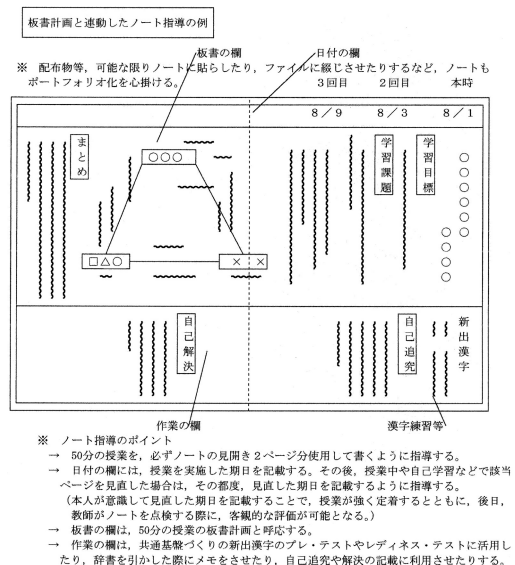


図11 ノート指導に活用した資料

エ 情意面に配慮した板書

板書においては、手書きの重要性を強調したが、限られた時間内での板書なので、標示物や挿絵など、事前の準備次第で1単位時間に盛り込む学習量は左右されることを指摘した。特に、教科書等の挿絵の活用や手作り教材、色の工夫などによって生徒の情意面はいくらでも高揚できることを、板書モデルで提示した。(図10「模擬授業における板書」参照)

5 成果及び今後の課題

「教職実践研究Ⅰ」では、授業設計の基礎を身に付けさせるために、実践的にステップを踏む形で指導してきた。そして、観察実習や教育実習など学校現場へと学生を送り出す前に、略案程度の学習指導案を自らの力で書き上げ、それを基に模擬授業を実践してほしいとの願いから試行錯誤を重ねてきた。

今回、取り上げた師範的な模擬授業の改善は、あくまでも学校現場でチャレンジする実践的な取組へのアプローチをスムーズに展開させるための一助として設定したものである。また、ここでの試みが、学校現場での実習において、幾ばくかのゆとりにつながれば幸いである。

今後、授業を主体とした実践的な活動をより一層活性化させるためにも、今回の実践における成果と課題について述べてみたい。

【成果】

(1) 理論知と実践知のバランスを図る効果

今回の学習指導案(略案)と師範的な模擬授業の提示によって、2, 3講で獲得した理論知と第3ステージで実践した模擬授業で獲得した実践知とのバランスを図る効果があった。また、スムーズな学校現場へのつなぎとしての役割も、学生の自己診断の変容からとらえることができた。

(2) コミュニケーション能力の活性化

子どもとのかかわりや発問、KRの重要性を確認し、学習のねらいにそって興味・関心を高めたり、思考を深めたりするような発問、KRを工夫するなど、コミュニケーションに対する学生の認

識が高まった。

(3) 学習指導案と模擬授業の連動

学習指導案と模擬授業の関連性はもちろんのこと、教材分析が授業デザインに反映することや学習指導案が発問や板書計画、ノート指導と密接に連動していることを認識しながら模擬授業に取り組むことができた。

(4) 教材分析の構造化

授業分析の内容を、構造的に板書や発問計画に取り入れたことで、問題解決的な学習の効果や授業の山場などを確認させることができた。

【課題】

(1) 時間的な保証

模擬授業における時間的な能率化や理解に費やす時間的な確保は保証できたものの、本時に至る共通基盤の確立に時間を費やしてしまい、板書をノートする時間や講義中の気付き等を記録する時間、学生相互に意見交換をする時間などの確保が十分ではなかった。

(2) 他教科への派生

これまで提供した国語科の模擬授業は、言語活動を主体としている点が共通しているとはいえ、他教科における学習指導案の作成や模擬授業の提供の在り方などを検討する必要がある。

(3) 学生に求めるレベル

学生が作成する学習指導案や実践する模擬授業のレベルを、どこに位置付けるべきか、評価等の在り方と同時に、学生のニーズに応えるモデル的学習指導案の提示や模擬授業の内容を精選・見直ししていく必要がある。

(4) 受け身の姿勢からの脱却

学生の受講の姿勢に、何としても魅力ある授業を展開する力を身に付けたいというひた向きさが今一つ伝わらないもどかしさがある。

教師になりたいという強い思いがあればこそ、選択の教職実践研究Ⅰに手を挙げた学生たちであ

る。講義に望むガイダンス段階での情意面への手立てもさることながら、早く指導案を作成してみたい、模擬授業をやってみたいと思わずにはいられない魅力ある学習指導案の提案、模擬授業の改善が望まれる。

5 終わりに

本学における実践的教職科目群の構築は、今後求められるであろう実践に前向きな教員像の育成に限りなく迫る改革である。今回の報告は極めて枝葉的な実践ではあったが、このようなささやかな実践の積み重ねこそが、今後の教員の資質向上につながる取組と考える。

また、時代の要請や変化などを鑑み、さらには学生の気質の変遷等にも十分配慮しつつ、学生自身から課題や改善策等が出される主体性をもった学生の育成を目指したい。そして、今後もよりよい教員養成カリキュラムの構築を目指し、実践の積み重ねに精進したい。

引用・参考文献

- 1：平成19年度 独立行政法人教員研修センター「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」採択事業『授業改善能力』と『研修指導力』の向上を検証可能とする『検証・評価一体型基礎学力向上研修モデルカリキュラム』の開発」成果報告書 平成20年3月1日 鹿児島大学
- 2：特別教育研究経費事業（平成19年度～平成20年度）「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発」平成20年度「教員養成シンポジウム－実践力を高める教員養成の在り方－」平成21年2月28日 鹿児島大学教育学部
- 3：福井大学教育実践研究第33号 平成20年 福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
- 4：「読解力向上に関する指導資料」－PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向－平成17年12月 文部科学省

国語科学習指導案 (略案)

日 時 平成21年5月8日 (金)
 対 象 教育実践研究 I 受講者 42名
 指導者 教授 隈元 浩二郎

1 単元名 「文学の楽しみ」(光村図書;平成2年度版,「朝のリレー(詩)」,「ひと声」)

2 教材名 「ひと声」(畑 正憲 著)

3 単元設定の理由

単元の構成と系統性

本単元は文学的文章と韻文の二つの教材によって構成され,「もの見方や感じ方をとらえる」ことを主たるねらいとしている。系統的には,第1単元「新しい世界へ」(学習の仕方を考える)を受け,第4単元「平和への願い」(情景や心情を読み味わう),さらに第7単元「少年の日の思い出」(人物の心情を読み味わい,作品の主題に迫る)につながっている。

教材の主題・特徴及び学習の意義(細案では韻文教材についても記載するが,ここでは省略)

本教材「ひと声」は,底なし沼に体の半分を沈め,絶望視された母馬の窮地を救った子馬のひと声,そこに込められた母馬と子馬の「親子の絆」を中心に描かれた物語である。また,危機的状況の母馬を必死に救おうとする「わたし(主人公)」や牧場の人々の姿が緊迫感をもってリズムよく描かれており,人馬の一体感が強く感じられる作品である。このように,動物を中心テーマにとりあげ,起伏に富んだ筋立てになっており,中学校1年生の生徒たちが興味をもって読み進めることができる作品である。また,一つ一つの文が短く,平易な語句が用いられているとともに,会話文を多く取り込んでいることから,親しみやすく学習しやすい作品であると言える。

指導学級の実態等

授業学級の生徒たちは, … アンケート調査や初発の感想から実態を把握
 省略 母馬の救助場面に興味が集中
 細かな情景描写や心理描写を関連付けて読み取る力は不十分
 主体的なものの見方や考え方の経験も不足

教材学習のねらい

そこで,本教材の学習では母馬と子馬のかかわりを読み取りの中心に据えながら,描写や会話部分に注目させ,馬の親子を取り巻く牧場の人々の行動や心情,自然条件等の情景なども丁寧に読み取らせながら主題に迫りたい。さらに,主題の追究場面では自然と人間のかかわりにも言及させ,自分なりの考えを持つことができるように指導したい。

4 教材の指導計画(全6時間;本時4/6;但し,単元は全9時間計画;「朝のリレー」省略)

難	主な学習活動	単	指導上の留意点
導 入	・全文の通読→初発の感想 ・作品の構成確認→段落分け ・学習課題の設定	1	・新出漢字等を確認させ,読みの抵抗をなくす。 ・場面ごとに小見出しを付けさせる。 ・初発の感想を手掛かりに,グループごとに設定させる。
展 開	・場面1の学習課題の解決	1	省略(場面1;始め~P39.L5)
	・場面2の学習課題の解決	1	省略(場面2;P39.L6~P45.L12)
	・場面3の学習課題の解決	1	省略(場面3;P45.L13~P49.L14)
	・場面4の学習課題の解決(本時)	1	省略(場面4;P50.L1~終わり)
終 末	・主題のまとめ ・類似作品の提示→発展課題の解決 ・自分なりの考えのまとめ→発表	1	・全場面を振り返り,それぞれの情景や心情の関連をとらえさせ,主題との関連を話し合わせる。 ・ひと声と類似作品を比較し,考えをまとめさせる。

5 本時の指導計画（4/6）

(1) 指導目標

場面4を読み取り、学習課題「どうしてS君はここに住んだ価値があったと、ため息をついたのだろうか。」を解決し、他の場面の情景や心情なども振り返りながら「母馬と子馬の親子の絆」が作品の主題であることをとらえさせる。

(2) 目標行動（G）

アオやランの情景や人々の会話文などを基に、学習課題「どうしてS君はここに住んだ価値があったと、ため息をついたのだろうか。」の自己解決を、例えば以下のようにまとめ、前3場面の関連ある情景や心情などを手掛かりに話し合い、作品の主題は「母馬と子馬の親子の絆」であると発表することができる。

学習課題の自己解決例

人々の必死の救出作業の甲斐もなく、絶望的な空気が流れた最後の場面で、「あきらめないでがんばって！」という必死の思いを込めたラン（子馬）のひと声で、アオ（母馬）に生きようとする力が甦り、ついには自力で泥の中から前足を引き抜いた。この一部始終を見ていたS君は、ランの母親に対する愛情のこもったひと声と、それに応えようとする母親の愛の強さとそのつながりの素晴らしさに感動して、ため息をついたのであろう。

(3) 下位目標行動

- ① 「絆」という漢字の構造の説明を聞くことで、子馬の「ひと声」の半分と、それに応えようと全力を振り絞る母馬の姿の半分が、互いに呼応し合って絆は結ばれていると気付くことができる。
- ② 学習課題の解決例を参考にしたり、場面1～3を振り返えったりすることで、「ひと声」の主題は「絆」にあると気付くことができる。
- ③ 模範解答の補説を聞き、課題解決を理解するとともに、模範解答をノートにまとめることができる。
- ④ 指名に基づいて、自己解決した内容をノートを参考にしながら発表することができる。
- ⑤ 話し合ったことや友達の発表を参考にし、自分の力で課題の解決をノートに書くことができる。
- ⑥ 各グループの発表を参考にし自分の意見をまとめ、発表することができる。
- ⑦ グループの代表としてまとめた意見を発表することができる。
- ⑧ グループの司会・進行としてグループの意見を引き出し、まとめることができる。
- ⑨ 「価値」と「ため息」の内容について、自己追究や友達の発表を参考にしながら自分の考えを述べるすることができる。
- ⑩ 指示に従い、グループをつくることができる。
- ⑪ 指名に従い、自己追究の内容を発表することができる。
- ⑫ 範読や傍線を手掛かりに、自己追究をノートにまとめることができる。
- ⑬ 傍線を引いた箇所を発表することができる。
- ⑭ 範読を聞きながら、学習課題の解決の手掛かりとなる部分に傍線を引くことができる。
- ⑮ R 答え合わせに従って採点し、誤った漢字を再度練習して書くことができる。
- ⑯ R 出題に従い、新出漢字をノートの作業の欄に記載することができる。

問1 地盤 問2 巨体 問3 瞬間

- ⑰ R 本時の学習課題を指示棒の動きに従い、一斉読みすることができる。

どうしてS君はここに住んだ価値があったと、ため息をついたのだろうか。

- ⑱ R スクリーンに表示されたあらすじを読み、作品の内容を理解することができる。

母親と子馬の話である。春先の日暮れ、牧場に帰る途中の馬の群れの中で、一頭の母馬が底なしの泥沼に体が半分落ち込んだ。駆けつけた人々にも、すぐには助ける方法がない。夜が来て泥が冷えれば、馬の命は絶望的。母馬自身にも、すでにあきらめの様子が見える。傍らには子馬がおり、そばを離れない。空腹のようだが、他の馬と一緒に馬房へ帰ろうとはしない。やがて星が光った頃、やっとトラクターが到着し、ロープで母馬を引き上げようと試みるが…。

- ⑲ R 表示された学習目標を読み、本時の流れを見通すことができる。

国語科模擬授業「ひと声」に参加し、きめ細かな指導の在り方や指導と評価の一体化の取組方法などを押さえ、実践的な教授法を学ぶ。

(4) 目標関連図（省略）

(5) 本時の実際 (4/6)

時間	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1'	<p>【共通基盤づくり】 1 本時の学習目標を確認する。(19 R)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 50分の模擬授業の目的や意義を確認させる。 模擬授業終了後に指導案を配布し、確認させる。
	<p>国語科模擬授業「ひと声」に参加し、きめ細かな指導の在り方や指導と評価の一体化の取組方などを押さえ、実践的な教授法を学ぶ。</p>	
1'	<p>2 「ひと声」のあらすじをとらえる。(18 R)</p>	<ul style="list-style-type: none"> スクリーンに表示し、読みながら確認させる。
1'	<p>母親と子馬の話である。春先の日暮れ、牧場に帰る途中の馬の群れの中で、一頭の母馬が底なしの泥沼に体が半分落ち込んだ。駆けつけた人々にも、すぐには助ける方法がない。夜が来て泥が冷えれば、馬の命は絶望的。母馬自身にも、すでにあきらめの様子が見える。傍らには子馬がおり、そばを離れない。空腹のようだが、他の馬と一緒に馬房へ帰ろうとはしない。やがて星が光った頃、やっとトラクターが到着し、ロープで母馬を引き上げようと試みるが…。</p>	
1'	<p>3 本時の学習課題を確認する。(17 R)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 文末の引用部分を確認し、傍線を引かせる。
5'	<p>どうしてS君はここに住んだ価値があったと、ため息をついたのだろうか。</p>	
5'	<p>4 場面4の新出漢字を書く。(15~16)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 新出漢字を中心に3問出題し、不正解等には練習を促す。 筆記道具を手に持ち、傍線を引く準備ができたことを確認してから範読を始める。
5'	<p>5 学習課題の解決の手掛かりとなる部分に傍線を引きながら、場面4の範読を聞く。(14)</p>	
5'	<p>6 傍線を引いた箇所を発表する。(13)</p>	
5'	<p>【自己追究】 7 傍線等を手掛かりに、自分の力で学習課題の答えを書く。(12)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 作業の欄に記載するように指導する。 書く前に、再度、学習課題を確認させる。 机間指導で個々の自己追究を確認し、指名計画を立てる。
5'	<p>【相互練り上げ】 8 自分の自己追究を発表する。(11)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 内容的に高い追究でもゆさぶりを掛け、細やかに確認をさせながら情景をとらえ、心情を読み取らせる。
15'	<p>9 「価値」と「ため息」についてグループで話し合い、発表する。(7~10)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 司会・進行や発表者などの役割分担を決めてから話し合いに入るよう指示する。 グループ発表のポイントを要約するとともに、疑問点や検討課題を指摘し、個々の考えを発表させる。 見え消しで自己追究を朱書き修正させ、発表させる。 各発表に賞賛を与え、模範解決を提示する。 絆の構造を説明し、「ひと声」のもつ意味や母子の役割などについて気付かせる。
15'	<p>10 各グループの発表について意見を交換する。(6)</p>	
15'	<p>【自己解決】 11 話し合ったことや発表を参考に、自己追究を修正する。(5)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 田宮先生の指導、新学習指導要領のポイントや附属学校の研究公開の参加などについて指示する。
2'	<p>12 作品全体を振り返り、主題を考え、発表する。(G, ①~④)</p>	
2'	<p>13 次時の予告を確認し、今後の学習に共通しをもつ。</p>	

(6) 本時の評価

場面4を読み取り、学習課題「どうしてS君はここに住んだ価値があったと、ため息をついたのだろうか。」を解決し、他の場面の情景や心情なども振り返りながら「母馬と子馬の親子の絆」が作品の主題であることをとらえることができたか。